



かしはら



かしはら

第170号

平成 29 年

紀元 2677 年

- 宮司あいさつ
- 神武天皇二千六百年祭典行事報告
- 特別寄稿
- 祭典行事報告
- 行事予定・内拝殿結婚式の御案内

冬が過ぎ、橿原神宮の境内も春の装いを感じられる季節となつて参りました。皆様方には平素より橿原神宮に對しまして篤いお心を寄せて頂いておりますこと拝謝申し上げる次第でございます。

平成二十九年の正月は多少の天気は崩れはあったものの、三が日過去最高でありました。昨年の人出を更新し、一〇八万人の方々にお参りを戴くことが出来たことは大変有難く存じております。

年頭にあたり宮内庁より昨年の皇后陛下の御歌三首が発表されましたが、その内の一首に当神宮をお詠みになったものがございました。

神武天皇二千六百年祭にあたり橿原神宮参拝

遠つ世の風ひそかにも聴くごとき

櫻の葉そよぐ参道を行く

昨年御祭神武天皇二千六百御式年にあたり、畏くも天皇皇后両陛下には橿原神宮に御参拝を賜りましたことは、洵に有り難き極みに存じ上げた次第でありましたが、更にこの御参拝のことをお詠みになつていらしたことは、喫驚致すとともに唯々有り難く、改めて御皇室の神武天皇にお寄せになるお心にお応えすべく、私ども神職以下職員は心新たに愈々日々の御奉仕に邁進せねばと、深く感じた次第であります。

扱、本年は大政奉還（慶応三年十月十四日）より一五〇年の節目の年であります。

三〇〇年続いた徳川幕府の十五代將軍慶喜公が政権を朝廷に返上した出来事であり、源頼朝が鎌倉の地に幕府を開いて以来続いた武士による政治が終わり、茲に天皇を中心とした新しい時代が始まったのです。その大政奉還から約二ヶ月後、明治天皇におかせられては王政復古の号令を出され、新しい時代の指針を示されました。

この王政復古の号令の一節に「諸事神武創業ノ始ニ原キ」の一節があります。これを分かりやすく述べるのなら、全てのことには神武天皇が日本の国を始められた昔に立ち帰つて、と云う意味であります。明治天皇は新しい時代の政の基本を御祖先である第一代神武天皇が我が国を建てられた大精神を手本とされたのであります。それではこの建国の精神とはどのようなものでありましょうか。神武天皇は御祖先である天照大神の御心を世の中に広め、平和で豊かな国作りを目指して日向の地より東征の途に立たれ、想像を絶する幾多の困難を排した末に大和の地に辿り着き、畝傍山の東南橿原に宮を営み、詔を仰せ出されます。実に今より二六七七年前のことであり、ここに日本は建国されたのであります。この詔を拝しますと神武天皇の建国の精神が分かります。

この詔には「敬神崇祖」「政治の基本」「感謝の念」「道徳心の培養」「平和・博愛の精神」が述べられていますが、これらのことは我が国の美風として時が経ても我々日本人の精神の根底に流れており、結果的にこの神武天皇の建国の精神が大きな力となつて、明治維新から僅か数年で世界の列強と肩を並べるに到つたのであります。

現今の世界の情勢を見ますとき、多くの国が自国の誇り民族の誇りを取り戻そうとしている時代の潮流の中で、我が国も自虐史観から脱し時代に即した憲法法律の改正も広く論議し、戦後失われた国の誇り日本人の誇りを取り戻す必要があります。その為には私ども日本人は改めてこの神武天皇の建国の精神を想起する必要があると存じます。明治天皇が新しい時代の手本とされた我が国建国の祖である神武天皇の御神徳を遍く世の中に知らしめ、世界の平和と人類の幸せを日々祈り続けるのが橿原神宮の使命であります。どうか今後とも橿原神宮に変わらぬ御支援御協力を賜りますようお願い申し上げます。

橿原神宮宮司 久保田昌孝

神武天皇二千六百年祭典行事報告

平成二十八年	平成二十八年	平成二十八年	平成二十八年	平成二十八年	平成二十八年	平成二十七年	平成二十七年	平成二十七年	平成二十七年	平成二十七年	平成二十七年	平成二十七年	平成二十六年	平成二十六年	平成二十六年
四月二日(土) 午前十一…三十	三月九日(水) 午前十一…〇〇	三月八日(火) 午後七…〇〇	三月五日(土) 午後一…〇〇	三月五日(土) 午前十一…〇〇	二月二十五日(木)~ 二月二十九日(月)	十月五日(月)~ 十月三十日(月)	七月十四日(火)、十八 日(土)、二十日 (月)、二十二日 (水)、二十三日(木)	六月二十二日(月)~ 七月二十九日(水)	六月二十二日(月)~ 七月二十七日(月)	六月二日(水)	四月一日(水)	平成二十七年二月十八 日(水)~平成二十八年 二月十九日(金)	十月二十九日(水) 午後七…〇〇	十月二十七(日) 午後一…〇〇	十月二十七(日) 午前九…〇〇
第七十一代横綱 鶴竜 土俵入	本殿遷座祭 奉幣之儀	本殿遷座祭 遷座之儀	本殿遷座祭 本殿清祓之儀	本殿遷座祭 御飾並清掃之儀	お清石持ち行事	御本殿特別公開	御本殿特別公開	社殿洗淨 (株)カネジユウ	重要文化財 文華殿 庭園修繕 庭舎 MAKIOKA	神武天皇御東遷パネル展示	谷上社寺工業(株)	御本殿檜皮葺屋根葺替工事 御本殿覆屋仮施工事	仮殿遷座祭	仮殿遷座祭 清祓之儀	仮殿遷座祭 御飾並清掃之儀

提燈奉納	御神宝調製	勅使館改修工事	平成二十八年	平成二十八年	平成二十八年	平成二十八年	平成二十八年	平成二十八年	平成二十八年	平成二十八年	平成二十八年	平成二十八年	平成二十八年	平成二十八年	平成二十八年
			十一月五日(土)・六日 (日)、十三日(日)~十二 月十一日(日)	十一月五日(土)、十二 日(土)、二十五 日(金)	十月十五日(土)	十月三日(月)	九月十七日(土)	八月二十日(土)	六月十八日(土)	五月十五日(日)	四月二十五日(月)~ 六月十九日(日)	四月十一日(月)~ 十七日(日)	四月三日(日) 午後三…十三	四月三日(日) 午前十一…〇〇	四月三日(日)
			文華殿秋季特別公開	夜間正式参拝と文華殿饗膳	特別講演「神武天皇の御生涯(下)」 皇學館大学 教授 白山芳太郎氏	畑美枝子氏 ソプラノ奉納コンサート	観月会	特別講演「神武天皇の御生涯(中)」 皇學館大学 教授 白山芳太郎氏	特別講演「神武天皇の御生涯(上)」 皇學館大学 教授 白山芳太郎氏	池坊 献華祭	神武天皇二千六百年記念	文華殿春季特別公開	春の神武祭	天皇皇后両陛下 御親拝	神武天皇二千六百年大祭



神武天皇二千六百年大祭



横綱 鶴竜 土俵入



本殿遷座祭 遷座之儀



お清石持ち行事



仮殿遷座祭

神武天皇を仰ぐ伝統

日本文化大学教授 堀井 純二

明治維新は慶応三年十二月九日の「王政復古の大号令」に始まる。それには「諸事神武創業之始に原き」と明記され、建国の精神、理想に立ち返る方向性が示された。

■一 建国の精神

その建国の精神は「八紘為宇の詔勅」に示され、第一に「利民」即ち国民の幸福実現が表明され、続けて神々への感謝と「養正」が強調され、世界家族主義の実現が謳はれた。

■二 上代における神武天皇敬仰

上代の大改革である大化改新では、「上古の聖王の跡を遵守して治める」ことが宣せられ、天皇の統治が「天神」の委任であることが強調されると共に、神武天皇の建国の意義を「天下人民はみな平等で、全く分け隔てはなかつた」と、強調してある。

次いで壬申の乱では、神の訓へで神武天皇の陵に馬と兵器が奉納された。これは大海人皇子の側では初代神武天皇が強く意識されてゐたことを示してゐる。その大海人皇子、即ち天武天皇は、十年に皇祖の御魂を祀られてゐる。

また『万葉集』では、柿本人麻呂が天智天皇の大津宮の荒廃を悲しみ、神武天皇以来の歴史を回想し、神武天

皇を「聖」と讃へ、神武天皇に対する感激を示し、大伴家持は「族を諭す歌」で、大伴氏の神武天皇以下歴代に忠節を尽くしてきた歴史を回想し、祖先に恥じるのではないやう一族に訴へてゐる。

が、これは人麻呂や家持に限られたことではなかつた。大宝律令が完成すると、歴代天皇の御陵の治定整備が行はれ、天皇陵に守戸五戸が置かれ、毎年十二月の奉幣が規定された。

天皇崩御の大喪の場では「日嗣」が誅され、神聖な皇位を讃へ、その継承の次第を回顧し、崩御された先帝を偲んだ。また毎年正月元旦に行はれた「朝賀」の儀式も、歴史を回顧するものであつた。

このやうに律令国家の全盛期には、人々は機会あるごとに歴史を回顧し、神武天皇の建国に対する再認識がなされた。

■三 中世における神武天皇敬仰

ところが平安時代中期になると、人々は歴史を回顧せず、末法説や百王説を信じ、私利を追求し、国家解体の危機を迎へ、ついには保元・平治の乱を経て武士の世となる。

が、そのやうな中でも上代の盛時への憧憬は強かつた。それが延喜・天曆聖代観の広まりであり、中には建国の昔に思ひを馳せる人もゐた。それが神武天皇紀元の使用となる。鎌倉時代成立の『水鏡』は、その記述を神武天皇より始め、辛酉の年から嘉祥三年（西暦八五〇年）庚午の年までを千五百二十二年、その間天皇は五十五代と

し、中世末の『興福寺略年代記』も神武天皇紀元を記した。

その中で神武天皇が強く意識されたのが建武中興の時である。後醍醐天皇は石清水八幡宮への願文に神武天皇以来の皇統の継承を述べられた。また北畠親房は『神皇正統記』で、神武天皇即位元年を基準として、開化天皇条で皇紀「六百二十九年」と記し、雄略天皇条では外宮の鎮座を、神武天皇の即位より「千百余年の後」と記し、神武天皇段では「其の制度すべて天上の儀のままであった」と述べ、三種神器の同床共殿、天種子命と天富命の祭事掌握をその具体的な例として挙げた。親房には、もとの本源に帰さうとする「元元本本」の思想があつた。それは国家の創建を考へ、神代や神武天皇を考へることになる。

『年中行事大概』には、朝賀の儀式は即位の儀式と同じであり、神武天皇元年より行はれ、一条天皇の御世に中斷したと記されてゐるが、これは正月元旦に群臣の賀を受けられる儀式である。その精神は、後村上天皇の「朝拝のこゝろを」として

たかみくら とばりかかげて かしはらの

宮の昔も しるき春哉

の御製により、朝拝が神武天皇を追懐し、国家の創業を考へることにあつたことを物語る。

神武天皇回想が、建武中興を実現させ、また苦難の吉野五十七年の命脈を維持せしめたのであつた。

四 近世における神武天皇敬仰

近世学問研究発展の中で、わが国の歴史に心を潜めた水戸学では、光圀の時代から神武天皇に対する意識が強く、第二代綱条つなえだ、森儼塾げんじゅく、鈴木玄淳は神武天皇紀元を用ゐ、第九代斉昭の時代には、紀元二千五百年を意識して盛んに皇紀が唱へられた。

それと共に、義公時代に神武天皇の御廟の建立と御陵の修築が計画され、斉昭の時代にも同様の計画がされた。が、いづれも幕府との関係から実現には至らなかつたが、神武天皇敬仰の点で逸することの出来ないことである。

その水戸学の強い影響を受けた尊皇の志士たちは、佐久良東雄の

いっはりの かざり松ひて榎原の
宮のむかしに なるよしもがな

の心持ちで、王政復古に邁進していったのである。

このやうな神武天皇敬仰の伝統が、明治維新に際し「諸事神武創業之始に原」く事が宣せられることとなる。

神武天皇敬仰こそは、常に国家革新の原動力であつた。

堀井 純ニプロフィール

日本文化大学教授

昭和四十五年三月皇學館大学文学部国史学科卒業

昭和四十七年三月皇學館大学大学院文学研究科修士課程修了（国史学専攻）

昭和四十六年九月より報徳学園高校勤務

平成八年四月より日本文化大学勤務、現職

おもな著書

『建武の中興理想に殉じた人々』 錦正社

『講孟簡記に学ぶ』 幽顕国史教室

『欧米の世界支配と現代』 錦正社

『平泉澄博士会著作紹介』 共著 勉正社

『日本消滅―その防止のために―』 錦正社

祭典行事報告

有楽流献茶祭(五月五日)

端午の節句、有楽流十七代家元織田宗裕宗匠の御奉仕による献茶祭が斎行され、御神前に濃茶と薄茶の二碗がお供えされました。

祭典後には織田家所縁の文華殿(織田家旧本藩邸 表向御殿)にてお茶席が設けられ、参拝者にもお茶がふるまわれました。

初鮎奉献祭(五月十三日)

長良川で行われる鵜飼開きにて、宮内省式部職の鵜匠によって捕らえられた三十匹の鮎が鵜匠の使者として遣わされたボーイスカウト岐阜八団の酒井副団委員長他団員によって檀原神宮へ奉献され、御神前で奉告祭が斎行されました。

献華祭(五月十五日)

華道家元池坊による献華祭が神武天皇二千六百年の御式年を記念して斎行されました。池坊による檀原神宮での献華祭は今回が初めてであり、次期家元である池坊専好氏により御神前に生け花が奉献されました。

また、檀原神宮文華殿にて「奉納いけばな池坊展」が五月十五日から五月十七日まで開催され多くの参拝者が訪れました。

御田植祭(六月十六日)

神饌田齋庭にて御年の神(穀物の神)をお祀りし、稲の早苗を植えて、五穀豊穡を祈念する祭典が行われました。

御田植えされた苗は、秋の抜穂祭を経て、十一月に刈入れられ、十一月二十三日の新嘗祭に御神前へ御供えされました。

特別講演会(六月十八日・八月二十日・十月十五日)

神武天皇二千六百年の御式年を記念して皇學館大学教授白山芳

太郎氏による講演会「神武天皇の御生涯」を三回にわたって開催いたしました。

各回とも約八十名の方々が参加され、熱心に聴講戴きました。

夏越大祓(六月三十日)

本年は雨天の為、神宮会館に祭場を設けて夏越大祓が斎行されました。

県内はもとより、近畿各地より約三百名もの御崇敬の方々の御参列のもと、日々知らず知らず犯してしまった罪穢れを人形に託し祓い清めました。

夏越神楽祈禱(七月一日)

前日の大祓にて清々しい身に立ち返り後の半年間の無病息災・家運隆昌を神楽殿にて祈願いたしました。

神楽講習(七月二十三日〜二十六日)

神社音楽協会の先崎先生をお迎えして、檀原神宮会館に於いて恒例の神楽講習が開催されました。

講習会では、檀原神宮の神楽舞である「扇舞」「神舞」「鈴舞」と「浦安の舞」が正しい形で舞えるように先生より指導を受け巫女達は神様の心を和ませる舞を舞う為に熱心に研鑽を積んでいました。

第六十七回林間学園(八月一日〜五日)

小学三年生から六年生まで檀原市内の児童を中心に県内より百八十名の参加を得て開催されました。

今年も天候にも恵まれ、昨年中止された畝傍山登山、スポーツ教室などの総合学習も行われました。

最終日は閉園式後、檀原神宮子供会として音楽教室の子供達による合奏合唱や、若手神職・巫女による紙芝居の鑑賞会が開催されました。

また、ロビーでは、歴史・図工・科学教室の作品が展示され保護者らが子供たちの作品に熱い視線を注いでいました。



林間学園



神楽講習



夏越大祓



御田植祭



有楽流献茶祭

■ **タカマツペア檀原神宮参拝（九月十日）**

リオデジャネイロ五輪のバドミントン女子ダブルスで金メダルを獲得した高橋礼華、松友美佐紀両選手が九月十日、高橋選手の出身地である檀原で凱旋パレードを行った後、檀原神宮を訪れました。

檀原神宮内拝殿ではタカマツペアを始め所属チームの日本ユニシス関係者等による正式参拝が執り行われました。

リオ五輪の優勝報告と今年に行われる世界選手権の金メダル獲得を誓い、我国のはじまりの地である檀原で新たな目標への一歩を踏み出しました。

■ **秋季大祭（十月三日）**

御祭神神武天皇様による廣大無辺の御神恩に奉謝し、国家の栄と国民の平安、また全国崇敬者の家運隆昌と無病息災を祈願する祭典が執り行われました。

祭典には、平日にも拘わらず約七百名もの参列があり、御神前では巫女による厳かな扇舞が奏されました。

祭典終了後には、神武天皇二千六百年を記念してソプラノ歌手畑美枝子氏による奉納コンサートが執り行われました。

■ **抜穂祭（十月二十日）**

天候不良により心配された神饌田の稲穂もたわわに実り、神饌田斎庭にて御歳の神をお祀りして齋行されました。

刈り取られた稲は、懸税として十一月二十三日の新嘗祭の御神前に奉られ、その後、朝夕の祭典を始め、諸祭典にお供えされます。

また、収穫されたお米（ひのひかり）より祭典にお供えされる御神酒「かむやまと」も醸造されます。

■ **檀原菊花展（十月二十日～十一月二十三日）**

恒例の菊花展が檀原神宮外拝殿前にて開催され、丹誠込めた作品

が、訪れた人びとの目を楽しませてくれました。

品評会は十一月三日に行われ、今年より新に加わった単鉢部門（初心者対象）と恒例の総合花壇、三本立ち花壇などの部門で競われ、総理大臣賞、農林水産大臣賞などが選ばれました。

■ **新嘗祭（十一月二十三日）**

十一月二十三日、宮中では、天皇陛下御親下御親ら神嘉殿に於いて新穀を天神地祇に捧げ、御親ら召し上がり、その収穫を感謝する新嘗祭が執り行われました。

当神宮でも境内の神饌田で収穫された新穀を懸税として奉り、神恩に感謝する新嘗祭が四百五十名の参列のもと斎行され、御祭神と縁の深い「久米舞」が古式ゆかしく奉奏されました。

■ **檀原市農産物品評会並びに農業祭（十一月二十二日～二十三日）**

檀原神宮外拝殿前にて、第六十一回の農産物品評会（二十二日）と第四十六回農業祭が開催されました。

品評会にて特選に選ばれた十四点の農産物は新嘗祭に奉獻され、出品者達も祭典に参列されました。

農業祭は二十三日、オープニングセレモニーの和太鼓で幕を開け、外拝殿前のテントには農産物の展示コーナーや販売、また姉妹都市宮崎市からの出店や福引きコーナー等が設けられ、訪れた参拝者で終日賑わいを見せていました。

■ **丁酉大絵馬完成（十一月二十九日～三十日）**

大絵馬は皇太子殿下の御誕生（昭和三十五年）を奉祝記念して製作されてより、今回で五十八回目になります。

張り替え作業には、作者の日本画家藤本静宏氏も立ち会われ、「今年絵馬は玩具を題材に趣を変えて夫婦のにわたりを可愛らしく描き、来る歳が平穏な一年になるようにという願いを込めて描いた」と話され、境内はいち早く迎春ムードに包まれました。



丁酉大絵馬完成



檀原市農産物品評会並びに農業祭



檀原菊花展



秋季大祭奉納コンサート



秋季大祭

平成二十九年行事予定(四月～九月)

四月二日(日)	御鎮座記念祭	午前十時齋行
四月三日(月)	神武天皇祭 国栖奏奉納	午前十時齋行 午後一時齋行
四月七日(金) 九日(日)	春の神武祭	
四月九日(日)	甲飛十三期殉国の碑 第四十四回慰霊祭	午前十一時齋行
四月中旬	下種祭	午前十時齋行
四月二十九日(祝・土)	昭和祭	午前十一時齋行
五月二日(火)	長山稻荷社例祭	午前十一時齋行
五月五日(祝・金)	有楽流献茶祭	午前十時齋行
五月十二日(金)	初鮎奉献祭	午前十一時齋行
六月中旬	御田植祭	午前十時齋行
六月三十日(金)	夏越大祓	午後三時齋行
七月一日(土)	夏越神楽祈禱	午前十一時齋行
七月中旬	神楽講習会	午前九時～午後四時
八月一日(火) 五日(土)	林間学園	午前八時五十分～ 午後三時三十分
八月中旬	指定神社実習	
九月九日(土)	献燈祭	午後五時齋行

毎月一日・十一日・二十一日は月次祭を齋行。
 ※ご参列ご希望の方はお問合せ下さい。



■ 内拝殿結婚式の御案内
 日本のはじまりで
 新たな家族のはじまりを

橿原神宮では、趣の異なる三つの式場で結婚式を挙げていただくことが出来ます。その中でも、橿原神宮の重要な祭典が執り行われ、限られた方しか立ち入ることが出来ない内拝殿での挙式を御紹介致します。内拝殿は本殿と幣殿、二つの重要な建物を拝することが出来る大変尊い場所です。昭和十五年の社殿拡張と共に造営された建物です。内拝殿では日中と夕刻、両方で挙式いただくことが出来、日中は、参列者をはじめ、多くの参拝者にお二人の新しい門出を祝福いただきます。また、夕刻の暮れなずむ社殿の中での挙式では、廻廊の釣燈籠全てに光が灯り、神秘的な中での結婚式となります。

日本のはじまりの聖地であり、国の礎を築かれた神武天皇様と皇后様をお祀りする橿原神宮は、お二人の門出を祝うにふさわしい場所ではないでしょうか。

